

CAMD 報告会

(Center for Development of Advanced Medicine for Dementia)

認知症高齢者とのコミュニケーションはどうあるべきか？
～聴覚認知研究によって得られるヒント～

脳機能画像診断開発部 脳機能診断研究室

中村 昭範 室長

平成 27 年 11 月 12 日(木) 16 時 00 分～

第 1 研究棟 2 階大会議室

認知症は症状の進行に伴ってコミュニケーション障害を生じ、それが本人の QOL や介護・看護に大きな影響を与える大きな要因となる。従ってケアの実践場面におけるコミュニケーションのあり方について考えることは重要なテーマであり、それをエビデンスベースで提言していくことが本研究プロジェクトの主たる目的である。

人のコミュニケーションは言語以外に、顔の表情、視線、ジェスチャーといった非言語性の情報を介しても行われており、これらの「非言語性シグナル (Nonverbal Communication Signal: NCS)」は、相手の心の状態を理解し「心を通わせる」ために言語以上に大切な役割を果たしている。我々はこれまでの研究で、この NCS を認知する能力は、症状が進行した認知症高齢者においても比較的残存していること、更に、それらを積極的に用いたケアやリハビリ（にこにこリハ）を行うことによって、認知症高齢者のコミュニケーションシグナル認知能力を改善し、介護現場での意思の疎通に役立つこと等を明らかにしてきた。これらの成果は NCS の中でも主に視覚情報に焦点を当てた研究であるが、NCS には聴覚性のもの、すなわち話す声に込められた喜怒哀楽の感情や抑揚といった情報要素もあり、コミュニケーションの場面では視覚情報と同等に重要な役割を果たしている。従って今回は、健康高齢者や認知症高齢者における聴覚性 NCS の認知能力やその特徴について検討した結果を中心に報告し、介護者や医療従事者がコミュニケーションを取る際に留意すべき「話しかけ方」について考察していく。